大江匡房「花樹契遐年」詩序訳注

七田　麻美子

要　旨　大江匡房の詩序「花樹契遐年」（『本朝続文粋』巻九）は、現在までに未注釈の作品である。その制作は匡房四十代のことと考えられ、その時期の匡房の活躍を知る上で重要な資料となりうる。本稿では詩序の注釈を行い、その詳査を通して、匡房の詩序の作成態度や作品傾向を見ることを目的とする。

匡房はこの詩序において、中国の典拠を巧みに取り入れるとともに、江家を継承するという立場から、祖先の文藻を組み込んでいる。更に同時代に成立した日本漢文学のアンソロジー『本朝文粋』の使用も認められ、これらを複合的に操るところから、匡房の文学者としての高い意識が認められる。つまり、これにより匡房は己の抜きんでた力と才能、さらに家柄を誇示することになるのである。こうした側面が院政期最大の儒者としての匡房の活躍の背景となっていたとも考えられる。

一、はじめに

本稿は大江匡房の詩序「花樹契遐年」の詳査を試みるものである。本詩序は、匡房が四十代になったばかりの頃の作であると考えられるが、現存する作品の中で、この当時の作はそれほど多くない。匡房四十代はじめというのは、後三条朝における躍進的な抜擢の後、白河朝において参議となる前である。そのためか目立った活躍を確認しにくいこともあり、匡房研究の中でも言及されることは少なかった。しかし匡房の生涯を見渡す上で重要な時期であることは言うまでもなく、匡房四十代の活動を知る上で、本詩序は貴重な資料である。なお、本稿では詩序自体の解説を主たる目的とし、本詩序の成立背景、およびここから伺う事のできる匡房の思想についての論究は別稿にて扱うこととする。

凡　例

一、底本には『本朝続文粋』の通行テキストである『新訂増補国史大系　第二十九巻　下　本朝文粋　本朝続文粋』を使用し、異同に関しては基本的に底本の校合に従ったが、句読点は私に付した

一、訓読文は必ずしも平安時代の訓みによるものではない。

一、文章構造の分析に関しては、『作文大体』に従った。

二、文章構造

以下に『花樹契遐年』詩序を文章構造によって分析した全文を挙げる。なお、①～④の数字は私に付した段落番号である。

①

発句　夫

漫句　堀河院者、洛城甲第也。

緊句　風景春濃、泉石秋冷。

密隔句　准二紫庭一而二代、忝移二万乗之皇居一、

排二黄閣一而七廻、常作二三台之相府一。

傍字　博陸左丞相、

長句　為二此名区之主一、更加二潤色之功一。

雑隔句　仁山智水之象二天然一矣、楽以渉レ年。

歌堂舞榭之叶二地勢一焉、成レ之不レ日。

②

発句　方今、

長句　艶陽闌而暮月、曲水過而四朝。

長句　忽当二啓沃之余閑一、新命二詩酒之良宴一。

軽隔句　銀黄金紫、躡二珠履一而連レ榻、

揚江蓮峯、振二藻思一而塡レ門。

漫句　盛集之趣、誠以有矣。

③

発句　観其、

緊句　林樹重々、花蕚漠々。

長句　対三春之新粧、知二遐年之芳契一。

【題目】

密隔句　梅片之綻二嶺頭一也、自期二南山之寿一。

花　契遐年

【破題】

柳條之臨二岸脚一也、更待二東海之塵一。

樹　契遐年

傍字　況亦、

密隔句　訪二同情於仙都一、則紅桃開二三千之春霞一、

契遐年　花　契遐年

【本文】

求二異類於勝地一、亦白鶴占二勾曲之暁露一

契遐年　樹　契遐年

送句　者也。

④

発句　於戯、

長句　孫弘者西漢之重臣也、顧雍者前世之賢相也。

密隔句　翹材館之風豈不レ芳哉、恨レ出二海上之浪一。
　　通賢橋之月豈不レ潔哉、嫌レ混二江左之雲一。

漫句　如二我相府一者、

長句　仕二堯舜之君一、為二社稷之臣一。

漫句　在二人間一而応レ足。

長句　皇后之厳親、皇子之外祖、

漫句　於二天下一而不レ卑。

疎隔句　好二文章一、以為二政化之黼黻一、
　　崇二学校一、以為二礼楽之枢機一。

漫句　居レ今思レ古、不レ愧二於心一乎。

傍字　既而、

緊句　鐘漏漸深、絲竹頻奏。

長句　蒲二伏於恩渥之裏一、松二容於詞花之間一。

緊句　恐以二蕪篇一、慙叙二花樹一、

送句　云爾。

三、書き下し文

春日左丞相水閣に陪し同く花樹遐年を契るを賦す詩一首　清字　序を并せたり　江大府卿

①夫れ堀河院は、洛城の甲第なり。風景春濃やかにして、泉石秋冷すまじ。紫庭に准じて二代、忝くも万乗の皇居を移す。黄閣を排して七廻、常に三台の相府と作る。博陸左丞相、此の名区の主為り、更に潤色の功を加ふ。仁山智水の天然を象るや、楽以て年を渉る。歌堂舞榭の地勢に叶ふや、之を成せるに日ならず。

②方今、艶陽闌にして暮月たり、曲水過ぎて四朝たり。忽ち啓沃の余閑に当り、新に詩酒の良宴を命ず。銀黄金紫、珠履を躡みて榻を連ね、揚江蓮峯、藻思を振ひて門に塡つ。盛集の趣、誠に以て有るかな。

③観れば其れ、林樹重々たりて、花蕚漠々たり。三春の新粧に対ひて、遐年の芳契を知る。梅片の嶺頭に綻ぶや、自ら南山の寿を期す。柳條の岸脚に臨むや、更に東海の塵を待つ。況んや亦た、同情を仙都に訪へば、則ち紅桃三千の春霞に開き、異類を勝地に求むれば、亦た白鶴勾曲の暁露を占むる者なり。

④ああ、孫弘は西漢の重臣なりて、顧雍は前世の賢相なり。翹材館の風豈に芳からざらんや、海上の浪に出づるを恨む。通賢橋の月豈に潔からざらんや、江左の雲に混るを嫌ふ。我が相府の如きは、堯舜の君に仕へ、社稷の臣と為る。人間に在りて応に足るべし。皇后の厳親、皇子の外祖、天下において卑からず。文章を好みて以て政化の黼黻為り、学校を崇びて以て礼楽の枢機為る。今に居りて古を思へば、心に愧じざらんや。既にして、鐘漏漸く深まり、絲竹頻りに奏す。恩渥の裏に蒲伏し、詞花の間に松容す。恐んで蕪篇を以て、慙いに花樹を叙すと、云ふこと爾かり。

四、試訳

①堀河院は、洛城の邸宅です。その庭の光景は春は春たけなわの、秋は秋の深まりをみせるものです。禁中に準じる働きをして二代目となり、もったいなくも帝のお住まいを移しています。宰相の館として開いて七廻り目となっており、常に三公の相府となっていました。関白左大臣は、この名区の主となり、更にこの地に潤色を加えられました。庭の山水が天然の風情を作り出し、ここでの楽しみは長い年月にわたっています。歌舞のうてなはこの場にふさわしい様子をしており、こうなるまでにはずいぶんと時間がかかったものでございます。

②まさに今、晩春の季節たけなわの三月であり、曲水の宴が終わって4日目となりました。この日はにわかに臣下としてのつとめの合間にあたり、あらためて、詩酒の宴を催すよう命じられました。高位の貴族たちは珠の履物をはいて居並び、文学の士たちは、詩文を作る才能を振るってここに満ちています。盛集の趣とは、まことにこのようなものをいうのでございます。

③観ると、林の木は重なり合い、花はどこまでも広がっています。この春の新たな装いに対峙して、延年のすばらしい約束事を知りました。梅の花が嶺の上にほころびるとき、おのずから長寿を期し、柳の木が岸辺に臨んでいるとき、更に永遠不変を期待することになります。

ましてや、同じ思いのものを仙都に訪れると、紅桃が三千年の春霞に開くのに出会い、珍しいものを勝地に求めていくと、白鶴が句曲山の暁の露を占める様に出会います。

④ああ、孫弘は西漢の重臣であり、顧雍は前世の賢相であります。孫弘の建てた翹材館の周辺の風がどうして芳しく

ないことがありましょう、海上の浪を出るのを恨めしく思います。顧雍の家の前の通賢橋から見える月が、どうして潔くないことがありましょう、江左の雲に紛れるのを厭わしく思います。我が相府は、堯舜のような名君にお仕えになり、社稷の臣となっています。この世間においてその果たすところは十分なものです。皇后の厳親であり、皇子の外祖でいらっしゃいます。この天下において卑しいというようなところはありません。文章を好み、政化のためにそれを彩るものとし、学校を崇び礼楽の枢機となさいます。今この時にあって昔の事を思うとき、心に愧じることがございましょうか。

既に、宴のときは深まり、音楽は頻りに演奏されています。厚い恵みの内に平身低頭し、詞花の間に従容しております。この中で恐んでこの粗末な文章でもって、慇いに花樹のことを述べます。かく言う次第でございます。

五、語釈

○**花樹**　花の咲く樹。『白氏文集』にたびたび見られる語であるが、「別楼東坡花樹両絶」の二の句では、次の年へと変わらぬ姿を見せてほしいものとして、「西省対花憶忠州東坡新花樹因寄題東楼」では時間と場所を越えて変わらぬ姿を見せるものとして表出されている。この両首はいずれも白居易の忠州赴任時のものであり、「花樹」は官舎の近くの「東坡」に自ら植えたものである。「二年留滞在二江城一、草樹禽魚尽二有情一、何処殷勤重廻レ首、東坡桃李種新成」「花林好住莫二憔悴一、春至但知レ依二旧春一、楼上明年新太守、不レ妨還是愛花人」（「別楼東坡花樹両絶」『白氏文集』巻十八〔一一七七〕〔一一七八〕）。「看闕下丹青樹、不レ忘二天辺錦繡林一、西掖垣中今日眼南、賓楼上去二年心一、花含二春意一無二分別一、物感二人情一有二浅深一、最憶東坡紅爛熳、野桃山杏水林檎」（「西省対花憶忠州東坡新花樹

因寄題東楼」『白氏文集』巻十九〔一二一六〕にあるように、ここには様々な種類の木々があるが、同じく白居易の「歎老三首」の第三首では「花樹」は特に桃とされている。当詩序は三月の詠であり、さらに「契遐年」から、長寿の意に関わるものとして、桃の意も汲んでいる。

○**遐年**　長寿。永遠の年月。「雖レ踰二千祀一、而懐二旧蘊於遐年一」（左思「魏都賦」『文選』巻六）、「張子房之得二遐年一問レ仙、以已芥二万戸一」（大江匡衡「同公重上表」『本朝文粋』巻四〔一〇九〕「為同太政大臣辞左大臣第二表」『本朝文粋』巻五〔一二八〕）。

○**堀河院**　平安京左京三条二坊九・十の南北二町を占める邸宅。この詩序の当時は藤原師実の邸宅である。師実は頼通から伝領された後、承暦四年（一〇八〇）よりここに移ったことが『類聚雑要抄』巻二に見える。後に白河天皇、堀河天皇の里内裏とされた。なお、里内裏としては、藤原兼通の関白当時、貞観元年円融天皇が内裏の焼亡のためここに遷幸してよりのこと。このいきさつについては『栄花物語』巻第二「花山たづぬる中納言」に詳しい。

○**甲第**　立派な邸宅。「北闕甲第、当道直啓」。（張衡「西京賦」『文選』巻二）「大夫命曰、河原院者、昔乃是相府之甲第、今猶為二玉輦之景村一」（藤原惟成「秋日於河原院同賦山晴秋望多」『本朝文粋』巻八〔二二八〕）、「洛城有二一形勝一。世謂二之東三条一。本是大相国之甲第、伝為二左丞相之花亭一」（大江匡衡「暮春侍宴左丞相東三条第同賦渡水落花舞応製」『本朝文粋』巻十〔三〇八〕）。

○**春濃**　春がたけなわであるさま。「王城東南半里余、有二一玉洞一矣。煙霞春濃、泉石秋冷。蓋太上上皇、叡賞宸遊之地也」（菅原輔昭「春日同賦隔花勧酒応太上皇製」、『本朝文粋』巻十〔二九八〕）。

○**泉石**　山水の景色。庭の風景。「家山泉石尋常憶、世路風波子細諳」（「除夜寄微之」『白氏文集』巻五十三〔二三二四〕）、「西軒泉石北窓風」（「喜照密閑実四上人見過」『白氏文集』巻六十四〔三〇七六〕）。

○**秋冷**　秋の気配が冷ややかであるさま。秋の深まった様子。「年豊最喜唯貧客、秋冷先知是瘦人」（「送侯三郎中」『白氏文集』巻五十三〔一三七六〕）。

○**紫庭**　紫禁に同じ。宮中。「来献南音奉正朔、徳宗立レ仗御紫庭」（「驃国楽」『白氏文集』巻三〔一四三〕）、「開二紫庭之詩席一、快二一日於群臣一」（大江匡衡「夏夜守庚申侍清涼殿同賦避暑対水石応製」『本朝文粋』巻八〔二二三〕）。

○**准**　なぞらえる。「塚石椁闕高十余丈、以准二陵廟一、破二人家居一発二掘塚墓一及虜掠」（「後漢孝桓皇帝紀下」『後漢書』巻二十二）、「今准二紫禁一、二年移二朝儀於此地一」（大江匡衡「暮春侍宴左丞相東三条第同賦渡水落花舞応製」『本朝文粋』巻十〔三〇八〕）。

○**万乗**　天子のこと。「不レ受二於褐寛博一、亦不レ受二於万乗之君一。視レ刺二万乗之君一、若レ刺二褐夫一」（『孟子』「公孫丑上」）、「夫勝地伝レ名以雖二交美一、帝后未三必生二一家之光耀一、賢相輔レ主以雖二世栄一、父子未三必致二万乗之臨幸一」（大江匡衡「暮春侍宴左丞相東三条第同賦渡水落花舞応製」『本朝文粋』巻十〔三〇八〕）。

○**排**　開くこと。建物を開くといところから、そこが機能を始めるという意になり、ここでは関白の館となること。「方且排二鳳闕一以高游、開二爵園一而広宴」（顔延年「三月三日曲水詩序一首」『文選』）、「爰内相府、排二甲第一而代登臨」（紀斉名「三月尽同賦林亭春已晩各分一字応教」『本朝文粋』巻八〔二二〇〕）。

○**黄閣**　宰相の住む館。ここでは関白の館。「爾随二黄閣老一、吾次二紫微郎一」（「行簡初授拾遺、同早朝入閣。因示十二韻」『白氏文集』巻十九〔一二四一〕）、「方今、講芸之場者、是外祖大相国之旧居也。昔為二黄閣一、今為二青闈一」（大江匡衡「七言冬日陪東宮聴第一皇孫初読御注孝経応令詩一首」『本朝文粋』巻九〔二五八〕）。

○**三台**　三台星のことをいい、日本では左右大臣と太政大臣のこと。三公に同じ。「三公者象二天之三台星一」（『職原抄』巻上）。

○**博陸**　摂政・関白のこと。ここでは師実の任ぜられた関白を指す。博陸は漢代武帝によって霍光が博陸侯に封ぜられたことより、重臣のことを指す語。「向二蘋藻一以観レ魚、猶レ垂二渭陽之釣一、栽二梧桐一以待レ鳳、載轄二博陸之車一者也」（大江匡衡「夏日陪左相府書閣同賦水樹多佳趣応教」『本朝文粋』巻八〔二三二〕）。

○**左丞相**　ここでは関白左大臣藤原師実のこと。師実は延久元年（一〇六九）より左大臣、承暦二年（一〇七八）より関白となり、永保三年（一〇八三）左大臣を辞す。

○**潤色**　つやを加えること。さらに美しく立派にすること。「咸遵夫子之業而潤二色之一」（「儒林伝」『史記』巻五十八）、「夫六波羅蜜寺者、空也聖者権二輿之一、中信上人潤色焉」（慶滋保胤「七言暮春於六波羅蜜寺供花会聴講法華経同賦一称南無仏」『本朝文粋』巻十〔二七六〕）。

○**仁山智水**　山水のこと。仁者は山を楽しみ、智者は水を楽しむという、「知者楽レ水、仁者楽レ山、知者動、仁者静、知者楽、仁者寿」（『論語』「雍也篇」）よりの言葉。しばしば山水の意でも使われる。「客有二仁智之楽一、自助二山水之心一」（慶滋保胤「暮春於文章院餞諸故人赴任同賦別方山水深」『本朝文粋』巻九〔二九八〕）、「竊以、仁山受レ塵、滔漢之勢寔峙、智水容レ露、浴日之潤良流」（小野篁「奉右大臣」『本朝文粋』巻七〔一八六〕）。

○**天然**　山や川など自然の姿。「公孫丑曰、道則高矣美矣。宜三若登二天然一似不レ可レ及也。」（『孟子』）、「天然之性、不二且悦一乎」。（大江匡衡「七言冬日陪東宮聴第一皇孫初読御注孝経応令詩一首」『本朝文粋』巻九〔二五八〕）。

○**歌堂舞榭**　歌ったり舞ったりする場であるうてな。「若夫藻扃黼帳、歌堂舞閣之基」（鮑照「蕪城賦」『文選』巻十一）、「藻扃黼帳、歌堂舞閣之基」（大江匡房「堀河院奉為母后御八講願文」『本朝続文粋』巻十三）。

○**地勢**　場所の様子。「舟中国之人、不レ知二其地勢一、不レ能レ服二其水土一、雖レ有二強兵百一、不レ当二一臣安一。竊為二陛下重之臣一」（「前漢孝武皇帝紀」『漢書』巻十）、「陰条陽葉之誇二天時一、開二春風一落二秋霜一、月台水閣之随二地勢一、郢斤声

越斧跡」（大江以言「七言暮秋陪左相府宇治別業即事」『本朝文粋』巻九〔二七〇〕）。

○**艶陽**　晩春の時節のこと。「艶陽時節又蹉跎　遅暮光陰複若何」（「春晩詠懐贈皇甫朗之詩」。『白氏文集』巻六十八〔三四四五〕）、「蓋当二曲水之翌日一、翫二艶陽之風光一」（大江匡衡「暮春侍宴左丞相東三条第同賦渡水落花舞応製」『本朝文粋』巻十〔三〇八〕）。

○**暮月**　春の終わりの月。三月のこと。「大業末年春暮月、柳色如レ烟絮如レ雪」。（「隋堤柳」『白氏文集』巻四〔一六七〕）、「春之暮月、月之三朝、天酔二于花一、桃李盛也、我后一日之澤、万機之余、曲水雖レ遥、遺塵雖レ絶、書二巳字一而知二地勢一、思二魏文一以翫二風流一、蓋志之所レ之、謹上二小序一」（菅原道真「三月三日同賦花時天似酔応製」『菅家文草』巻五、『本朝文粋』巻十〔一九五〕『和漢朗詠集』〔三九〕）。

○**曲水**　曲水の宴。陰暦三月の上巳に行われる。古代中国で禊祓の行事が遊宴化したもの。日本では『日本書紀』などに記事が見えるが、一時廃絶。その後嵯峨天皇時に再会したとされる。摂関期などにおいては宮中以外の私邸でも盛んに催されていた。「三日、庚子、有二曲水会一（中略）題詩、式部大輔出二因流汎酒一、用レ之、申時許天気晴、水辺立座、下土居、羽觴頻流、移二唐家儀一、衆感懐」（『御堂関白記』寛弘四年三月三日条）。

○**四朝**　四日目の朝。

○**啓沃**　臣下のものが善導を君主に告げること。臣下としての勤め。「啓二乃心一、沃二朕心一。」（『書経』「説命上」）による。「而臣啓沃悔二於既往一、摂理昧二於方来一」（大江匡衡「同公重上表」『本朝文粋』巻四〔一〇九〕「為同太政大臣辞左大臣第二表」『本朝文粋』巻五〔一二八〕）、「夫偏事二啓沃一者、玄元養生之方難レ求、偏賞二煙霞一者、緑綬補袞之道易レ闕」（大江匡衡「夏日陪左相府書閣同賦水樹多佳趣応教」。『本朝文粋』巻八〔二三二〕）。

○**余閑**　ひまな時間、仕事の合間。「余閑愛二重九之名一、秋菊盈レ園、而持二醪靡由一、空服二九華一、寄二懐於言一」（陶淵

明「九日間居」)、「聖上亦万機余閑」(大江匡衡「七言九月尽日同賦送秋筆硯中応製一首」『江吏部集』巻上)「我君乗二万機之余閑一、賜二一日之栄宴一」(大江匡衡「七言三月三日同賦花貌年年同応製」『江吏部集』巻下)。

○**詩酒**　詩を作り酒を飲む宴のこと。「不レ見二詩酒客一。卧来半月余、合和新薬草、尋検旧方書、晩霽烟景度」(「病中逢秋招客夜酌」「白氏文集」巻八〔三六六〕)、「笙歌夜月家々思、詩酒春風処々情」(菅原文時『和漢朗詠集』巻上「春興」〔二四〕)。

○**銀黄金紫**　貴人のこと。金印紫綬と銀印黄綬のことと思われる。類似の表現としては、「金章紫綬、応二嘉招一而風来、子墨兎毫、蓄二秘思一而霧集」(大江匡衡「暮秋陪左相府書閣同賦寒花為客栽応教」『本朝文粋』巻十一〔三二四〕)、「会而連レ榻者、金章紫綬之客、唱而整レ節者、鵾絃鳳管之声」(紀在昌「北堂漢書竟宴詠史得蘇武」『本朝文粋』巻九〔二六一〕)、「雖金紫銀黄之余裔」(大江匡房「石清水不断念仏縁起」『本朝文集』巻五十二)。

○**躡珠履**　珠履は珠で飾ったくつ。珠履をふむとは、高い身分のたとえ。「出躡二珠履一動以二千百一」(左思「呉都賦」『文選』巻五)、「鋤二蕭艾一而移二清芬一、在レ座者皆是躡二珠履一、鑵二砂磧一而養二佳色一、来レ門者莫レ不レ乗二錦車一」(大江匡衡「暮秋陪左相府書閣同賦寒花為客栽応教」『本朝文粋』巻十一〔三二四〕)。

○**連榻**　こしかけを連ねること。ここでは人々が居並ぶこと。「澄觴満二金罍一、連榻設二華茵一」(魏太子「擬魏太子鄴中集八首　第二首」『文選』巻二十)、前項「銀黄金紫」参照。

○**揚江蓮峯**　揚子江と現在の陝西省にある蓮華峰のこと。ここでは宴会に参加する文人のこと。川は智者、山は仁者を表すということについては「仁山智水」の項参照。

○**藻思**　詩文を作る才能。「或藻思綺合、清麗芋眠」(陸機「文賦」『文選』巻十七)。「其外金張華族之家、風月藻思之輩、随二喜其事一、周二旋此場一者、済々煌々」(大江以言「七言暮春施無畏寺眺望」『本朝文粋』巻十〔二八四〕)。

○**塡門**　客が門に満ちること。「賓客亦塡レ門、及レ廃、門外可レ設二爵羅一」（『漢書』巻五十「鄭當時伝」）。

○**花蕚**　花。「栄聯花蕚詩難レ和」（「和楊六尚書喜両第漢公転呉興、魯士賜章服、命賓開宴、用慶恩栄、賦長句見示」『白氏文集』巻六十七〔三三七九〕）。

○**漠々**　広がっている様子。「楼観水潺潺、龍潭花漠漠」（「寄王質夫」『白氏文集』巻十一〔五三一〕）、「官道柳陰陰、行宮花漠漠」（「西行」『白氏文集』巻六十三〔三〇一九〕）、「花香漠漠声冷冷」（「題香山新経堂招僧」『白氏文集』巻六十八〔三四六九〕）。「春之色、秋之光。花漠漠、月蒼蒼」（兼明親王「遠久良養生方」『本朝文粋』巻一〔三八〕）。

○**重々**　木々の枝が重なっている様子。「溪嵐漠漠樹重重、水檻山窓次第逢」（「題元八溪居」『白氏文集』巻十六〔九四一〕）、「軒檻重重、碧波亭之構不レ異、池塘眇眇、青草湖之様相同」（源順「晩秋遊淳和院同賦波動水中山」『本朝文粋』巻八〔二二九〕）。

○**三春**　春三ヶ月のこと。「惜レ逢二金谷三春尽一、恨レ拝二銅楼一月遅一、詩境忽来」（「将至東都先寄令狐留守」）『白氏文集』巻五十七〔二七二二〕）、「三春之初、九重之内」（大江朝綱「早春侍内宴賦聖化万年春応製」『本朝文粋』巻九〔二三四〕）。

○**新粧**　新たなよそおい。この年の春の新たな様子。「於是昼漏頻転、新粧未成」（菅原道真「早春観賜宴宮人同賦催装応製」。『本朝文粋』巻九）。

○**芳契**　すばらしい春の約束ごと。ここでは花や樹が今年も美しい姿を見せること。管見の限り用例見あたらず。ただし「芳」を敬称を為す接頭語とする例は多く、他に、すばらしいこと、美しいことの接頭語として使用する例としては「芳規」（「昌国忠讜、人臣所レ無。連兵五国、済西為レ墟。燕王受レ間、空聞二報書一。義士慷慨、明君軾閭。間乗継レ将、芳規不レ渝。」「楽毅列伝」『史記』）などがある。また、「芳」が花のかぐわしい香りを指すことから春

を表わすこともあり、その例としては「芳辰」（「郊野遊行熱、村園次第過、驀山尋二浥澗一、蹋水渡二伊河一、寒食青青草、春風瑟瑟波、逢レ人共二杯酒一、隨レ馬有二笙歌一、勝事経非レ少、芳辰過亦多、還須自知レ分、不レ老擬如何」「間遊即事」『白氏文集』巻六十六〔三〇三三〕）などがある。

○**梅片**　梅のはなびら。梅と柳の対句は詩文において多々見られる。「波払黄柳梢、風搖白梅朶」（白居易「郡斎暇日、辱常州陳郎中使君、早春晩坐水西館書事詩十六韻見寄。亦以十六韻酬之」『白氏文集』〔三六二二〕）など白詩にもあり、特に「梅房小白裏、柳彩軽黄染。」（白居易「開元寺東池早春」『白氏文集』〔五五三〕）は、一連の白居易忠州赴任時のものである。なお、本朝においての梅と柳の対に関しては、『和漢朗詠集』等でも春の風物としてしばしば見られる。「至二于彼東岸西岸之柳、遅遅不レ同、南枝北枝之梅、開落已異一、不二是春王之有レ私、誠任二陰土之自然一也」（慶滋保胤「早春同賦春生逐地形」『本朝文粋』巻八〔二一七〕、『和漢朗詠集』巻上「早春」〔十一〕）、「白片落梅浮二澗水一、黄梢新柳出二城墻一」（白居易『和漢朗詠集』巻上「梅」〔八七〕）、「梅花帯レ雪飛二琴上一、柳色和レ煙入二酒中一」（章孝標『和漢朗詠集』巻上「梅」〔八八〕）。

○**嶺頭**　山の上。「回日眼明河畔草、去時腸断嶺頭花。」（許渾「南海府罷帰口経大庾嶺贈張明府」『全唐詩』）。なお嶺の上の梅ということであると、上記詩のとおり、大庾嶺の梅を指すことが多い。「青絲縿出陶門柳、白玉装成庾嶺梅」（大江朝綱『和漢朗詠集』巻上「梅」〔九〇〕）、「五嶺蒼々雲往来、但憐大庾万株梅」（『和漢朗詠集』巻上「梅」〔九一〕）、「大庾嶺之梅早落、誰問二粉粧一、匡廬山之杏未レ開、豈趁二紅艶一」（大江維時『和漢朗詠集』巻上「柳」〔一〇六〕）はその例である。なお『江談抄』では「五嶺蒼々雲往来、但憐大庾万株梅」を菅原文時の「天暦十年内裏御屏風詩」とした上で、「広州山中嶺有レ五、其一在二大庾一。嶺上多二梅樹一。南枝先花開」と説く。

○**柳條**　柳の枝。「曲江柳条漸無レ力、杏園伯労初有レ声、可レ憐春浅遊人少、好傍二池辺一下レ馬行」（「曲江早春」『白

氏文集』巻十四〔七一七〕)。

○**岸脚**　川の岸辺。「至彼献酬之浅深任波心、巡行之遅速経岸脚」(大江匡衡「三月三日陪左相府曲水宴同賦因流泛」『本朝文粋』巻八〔二一九〕)。柳は多く水辺に生えるとされその風景を詠んだものは多い。「至二于彼東岸西岸之柳、遅遅不レ同、南枝北枝之梅、開落已異一、不二是春王之有レ私、誠任二陰土之自然一也」(慶滋保胤「早春同賦春生逐地形」『本朝文粋』巻八〔二一七〕)。

○**南山之寿**　長寿のこと。南山は終南山のこと。「如二月之恒一、如二日之升一、如二南山之寿一、不レ騫不レ崩」(『詩経』「小雅」「天保」)。東海之塵項参照。

○**東海之塵**　永遠の時間。東海は不変のたとえにしばしば使われる。「南山雖レ騫、東海雖レ変」(大江匡房「石清水不断念仏縁起」『本朝文集』巻五十二)。東海は春秋時代の斉を指すことも多い。「太公辟レ紂、居二東海之浜一。聞二文王一作レ興、曰、盍帰乎来。吾聞、西伯善養レ老者。天下有善養レ老、則仁人以為二己帰一矣」(『孟子』「尽心章句上」)にある太公は、太公望呂尚のこと。老齢に達してから文王に仕え、斉に封じられた。

○**同情**　同じ思い、同じ心。「異類」の項参照。

○**仙都**　仙人のような人々がいる場所。「陟降信宿迄于仙都、雙闕雲竦以夾路。」(孫興公「遊天台山賦」『文選』巻十一)。

○**紅桃**　桃の花。桃の咲く仙郷のモチーフは、陶淵明『桃花源記』のほか『漢武内伝』他の一連の西王母伝説にある。「奇レ犬吠レ花、声流二於紅桃之浦一、驚レ風振レ葉、香分二紫桂之林一」(都良香「神仙策」『本朝文粋』巻三〔七〇〕、『和漢朗詠集』巻下「仙家附道士隠倫」〔五四四〕)。

○**三千**　三千年。崑崙山の西王母の桃は三千年に一度実を結ぶ。「王母種レ桃三千歳一子」(『初学記』巻二十八「桃」)。

○**春霞**　春に立つかすみ。仙境にかかる霞。「春霞数行、尋二桃源一而躅遥。秋露一団、酌二菊水一而齢遠」（大江匡衡「寿考　対」『本朝文粋』巻三〔八二〕）。但し、『桃花源記』などの記述には霞のかかる仙境の直接的表現は見あたらない。春霞という語に関しても、特に中国の唐代までの漢詩文には、用例は極めて少ない。

○**異類**　珍しいもの。異なった種類の人やもの。多く夷狄のことを指す場合が多い。「自二従初降一、以至二今日一、身之窮レ困、独坐愁苦、終日無レ観、但見二異類一」（李陵「答蘇武書」『文選』）。この用例と同じ用法として、「同李陵之入レ胡、但見二異類一」（「鶴処鶏群賦」『和漢朗詠集』巻下「鶴」〔四四四〕）がある。ただし「百薬灌叢寒卉冬馥。異類衆夥、于何不レ育」（左思「蜀都賦」『文選』巻四）では珍しい草々という意味で使われている。また大江匡衡に「衆芸皆置二異類之外一」（大江匡衡「初冬於都督大王書斎同賦唯以詩為友応教」『本朝文粋』巻九〔二六八〕）の用例がある。以下にこの詩序の題目・破題部を挙げると「方今、以レ詩為レ友、以レ道為レ交。六義互鋪同心之中、衆芸皆置異類之外」とあり、「同心」と「異類」の対など、本詩序の本文との近似が指摘できる。匡衡詩序での「同心」は詩の六義を尊ぶ人、「異類」は詩以外の諸芸を行う人という意味になる。

○**勝地**　すばらしい景色の土地。「乱峯深処雲居路、共踏レ花行獨惜レ春、勝地本来無二定主一」（「遊雲居寺贈穆三十六地主」『白氏文集』巻十三〔六四四〕）、「復雖レ得二其人一、而若レ不レ遊二勝地一、則似レ無二風月之媒一」（源順「暮春陪上州大王池亭同賦渡水落花来各分一字応教」『本朝文粋』巻十〔三〇七〕）。

○**白鶴**　白い鶴。『神仙伝』などでしばしば仙人の乗り物として現れる他、仙山の頂を飛ぶなどする。「千歳之鶴、随レ時而鳴、能登二於木一。其未二千載一者、終不レ集二於樹上一也」（『抱朴子』「内篇　対俗巻三」）にあるように、千年生きた鶴は松にとまるとされ、松と鶴の組み合わせが長寿の意を表すことが多い。なお、鶴が長寿を表すようになったのは唐代以降の比較的新しい概念である。『詩経』の「鶴鳴」などにおいては、鶴は鳴き声に特徴のあるものと

され（ただしここでの鶴は君子の象徴）、仙禽とされるのは前掲の『神仙伝』他『列仙伝』等見られる。長寿の鶴と松のモチーフは唐代の詩よりしばしば見られる。「松枝上鶴著下亀。千年不レ死仍無レ病。」（「和雨中花」『白氏文集』巻〔二二六八〕）、「看レ院祇留双白鶴、入レ門唯見一青松」（「尋郭道士不遇」『白氏文集』巻十七〔一〇一九〕）。日本の和歌でも『古今集』に「鶴亀もちとせの後は知らなくにあかぬこころにまかせてはてぬ」〔三五五〕の用例などがあるが、多くは屏風歌であり、長寿の表象とされるのは平安後期ともいわれている。なお松と鶴を長寿のモチーフとすることに関しては、佐藤義弘「中国吉祥物考（一）―松に鶴」（『文芸論叢』四十六号　一九九六年）、拙稿「吉祥考―平安時代後期の「松」―」（『創る・訪ねる・見る　文化創成の場としての名所研究プロジェクト論集』平成十七年度「魅力ある大学院教育」イニシアティブ総合日本文化研究実践教育プログラム研究成果報告書　二〇〇七年）に論がある。

○勾曲　句曲山のこと。仙人が集う山。茅君之山・茅山とも呼ばれる『太元真人東獄上卿司命真君伝』によると、仙人になった茅家の兄とその弟が三月六日に出会っている。「先句曲之会三朝、洞花欲レ落」（紀斉名「七言暮春勧学会聴講法華経同賦摂念山林」『本朝文粋』巻十〔二七八〕『和漢朗詠集』〔五九四〕）。「擬勝躅二于句曲一」（大江匡衡「初冬於都督大王書斎同賦唯以詩為友応教」『本朝文粋』巻九〔二六八〕）。

○暁露　朝露。「花在二舞楼空一、年年依二旧紅一。涙光停二暁露一、愁態倚二春風一。」（許渾「金谷桃花」『全唐詩』）。なお「暁露を占める白鶴」とは「風土記曰、鳴鶴戒レ露。此鳥性警。至二八月一白露降、流二於草上一。滴滴有レ声、因即高鳴相警。移徒所レ宿処、慮有二変害一也」（『芸文類聚』巻九十鳥部上）など鶴の性質による逸話があり、日本漢文においても、「至レ如二夫花帯レ露兮増レ鮮、露滴レ花兮警レ鶴、露未二凝戻一、乗レ衛之霜翎不レ閑、花転流離、濯レ蜀之錦文空縟」（源順「秋日遊白河院同賦秋花逐露開」『本朝文粋』巻十一〔三二三〕）などに見られる逸話である。また藤

原雅材の「五言仲春釈奠聴講毛詩同賦鶴鳴九皐」（『本朝文粋』巻十一〔三三七〕）は『詩経』「小雅」「鴻雁鶴鳴」を承ける詩序であり、その一節には鶴と暁露の関連みならず、さらに仙境と鶴の関連が見られる。以下にその部分を挙げると「観夫陽鳥標レ奇、霊禽抜レ俗。志在二千里一、凌二寥廓一而非レ遥、声鳴二九皐一、徹二窈冥一而漸聞。望二廻翔於蓬島一、霞袂未レ逢、思二控馭於茆山一、霜毛徒老。華池殊二其飲啄一、紫府隔以二封疆一。好音弥清、猶警二涼秋之暁露一、幽咽不レ罷、豈潜二暗夜之陰雲一」とあり、「求二異類於勝地一、白鶴占二勾曲之暁露一」部分との共通性が認められる。

○**孫弘**　漢の公孫弘のこと。武帝に仕えた。晩学にして、慎み深い人物として、『本朝文粋』巻一に源英明が「孫弘布被賦」をなしている。『漢書』列伝巻二十八に伝がある。

○**顧雍**　三国時代の呉の宰相。孫権に用いられた。「政事則顧雍、潘濬、呂範、呂岱。以器任二幹職一」（陸士衡「弁亡論上下二首」『文選』巻五十三）。

○**翹材館**　漢代の建物。才能のある人を招致するために建てられたもの。「西京雑記云、公孫弘自以布衣為レ相。乃開二東閤一営二客館一以招二天下之士一。其外曰、欽賢館以待二大賢一。翹材館以待二大館一」（『太平御覧』巻百九十四）。

○**通賢橋**　賢人に通じる橋。顧雍の自宅の前にかかる橋であったことが「蘇州志」に見える。「蘇州志曰、通賢橋、東有呉丞相顧雍宅」（『太平御覧』巻四百五）。なお、この隔句対部には現存資料では『太平御覧』に見られる佚文の記事からの引用が確認できる。ただし匡房が『太平御覧』を手にしていたということに関しては、現在は否定されている。相田満氏などによると、『太平御覧』に先立って渡来していた類書として、現在佚書となっている『修文殿御覧』の存在が考えられるとあり、匡房の参考したものも、あるいはこれか。詳しくは相田氏「『枕草子』漢故事考―『蒙求』故事とのかかわりを通して―」（『東洋文化』復刊七十五号　一九九五年）参照。

○**江左之雲**　揚子江下流の南岸の地一帯を指す。今の江蘇省。多くの宰相を輩出している地。「雖下彼公子王孫之珥二

貂蟬、賢士大夫之如中松竹上、而猶当三青眼一者、皆是隴右江左之才、揮二玄翰一者、本無二揚レ藻敷レ萼之文一」（紀斉名「三月尽同賦林亭春已晩各分一字応教」『本朝文粋』巻八〔二二〇〕）。

○**堯舜**　伝説上の聖王。「何則堯舜之民、以二堯舜之心一為レ心、禹湯之国、以二禹湯之慮一為レ慮」（大江朝綱「論運命対」『本朝文粋』巻三〔七八〕）。

○**社稷之臣**　国家の重臣。社は土地の神、稷は五穀の神というところから、社稷は国家の意。「是社稷之臣也、何以伐為」（『論語』「季子」）、「逮于下洛陽帝里、劉嬰暫拠二宮城一、建武王春、更始纔偸中甲子上、遂撫二運於堯胤一、垂二徳於火方一、静二我風雲一、安二我社稷一者、斯乃光武中興之主也」（菅原道真「八月十五日厳閤尚書授後漢書畢各詠史得黄憲」『本朝文粋』巻九〔二六三〕）。

○**人間**　世間。「吾安能棄二南面王楽一、而復為二人間之労一乎」（『荘子』「至楽」）、「人間之芳菲欲レ尽、象外之風煙猶濃」（菅原文時「暮春待宴冷泉院池亭同賦花光水上浮応製」『本朝文粋』巻十〔三〇〇〕）「此花非二是人間種一、瓊樹枝頭第二花」（大江朝綱『和漢朗詠集』巻下「親王　付王孫」〔六七一〕）。

○**皇后**　白河天皇の中宮、藤原賢子。父は源顕房。師実の養女。白河天皇東宮時より入内し、承保元年（一〇七四）立后。白河天皇最愛の后といわれる。善仁親王の母。

○**皇子**　善仁親王。後の堀河天皇。承暦三年（一〇七九）誕生。同年親王宣下。立太子は応徳三年（一〇八六）。

○**政化**　政治と教化。国を治めること。「湛雖レ在レ倉卒、造次必於二文徳一、以為二礼楽政化之首一、顛沛猶レ不レ可レ違」（『後漢書』第二十六巻「伏湛伝」）、「右匡衡、伏見二当時之政化一、莫レ不二延喜之旧風一」（大江匡衡「請徳蒙天恩因准先例兼任備中介闕状」『本朝文粋』巻六〔一六二〕）。

○**黼黻**　飾り。天子の着る礼服の縫い取り。しばしば文章のたとえに使われる。「黼黻文章、必以法故、無二或差貸一」。

（『礼記』「月令」）。

○**学校**　大学寮のこと。「設為庠序学校以教之。庠者養也、校者教也、序者射也」（『孟子』「滕文公上」）、「唯欲令天下海外知学校不廃、文章見重矣」（大江匡衡「請特蒙鴻慈因准先例兼任弁官左右衛門権佐大学頭等申他官替状」『本朝文粋』巻六〔一六〇〕）。

○**礼楽**　国家を治める根本原理。「礼也者、反其所自生。楽也者、楽其所自成。是故先王之制礼也以節事、修楽以道志。故観其礼楽、而治乱可知也」（『礼記』「礼器」）「導之以礼楽、而民和睦」（『孝経』「三才章　第八」）。「詩書仁義之路、照然就日、礼楽儒雅之林、靡風向風」（大江匡衡「請特蒙鴻慈因准先例兼任弁官左右衛門権佐大学頭等申他官替状」『本朝文粋』巻六〔一六〇〕）「文章昌則主寿、礼楽興則世治」（大江匡衡「七言九月尽日同賦送秋筆硯中応製一首」『江吏部集』巻上）。

○**枢機**　中心となるもの。「言行、君子之枢機、枢機之発、栄辱之主也」（『易経』「繫辞上」）、「文章織出、為百家之枢機。道徳瑩成、為九流之亀鏡」（大江挙周「弁耆儒　対」『本朝文粋』巻三〔九〇〕）。

○**鐘漏**　時間、時刻。「渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深」（「八月十五日夜禁中独直対月憶」『白氏文集』巻十四）、「出城門尽鐘漏、易経好誦者為誰」（菅原輔正「弁耆儒」『本朝文粋』巻三）。

○**絲竹**　楽器のこと。ここでは特にそれによって奏でられる音楽のこと。「徳者性之端也、楽者徳之華也、金石絲竹、楽之器也。」（『礼記』「楽記」）、「冠蓋如雲、絲竹終日」（大江匡衡「七言冬日陪東宮聴第一皇孫初読御注孝経応令詩一首」『本朝文粋』巻九〔二五八〕）。

○**恩渥**　厚いめぐみ。「臣被蒙恩渥、数見訪逮」（「蔡邕伝」『後漢書』列伝巻五十下）。ただし諸本「恩涯」に作るものが多い。『本朝文粋』などには「恩渥」の用例は見られず、「恩涯」の例のみある。なお「恩涯」は恩を受ける

立場。「忽望二寵樹一、遐邇眼驚、独立恩涯、進退股慄」。（菅原文時「為富小路右大臣辞職第一表」『本朝文粋』巻五〔一二四〕）。

○**蒲伏**　匍匐に同じ。腹ばうこと。力をこめること。「衆辱レ之曰、信能死刺レ我、不レ能レ死出二我袴下一。於レ是信熟二視之一、俛出二袴下一蒲伏。一市人皆笑レ信、以為レ怯」（「淮陰侯伝」『史記』列伝巻三十二）。

○**松容**　従容に同じ。ゆったりくつろぐこと。「予繫レ玉為レ佩。子曳レ繡為レ衣。従二容香烟下一」（「昔与微之在朝日、同蓄休退心。迨今十年、淪落老大、迫尋前約、且結後期」『白氏文集』巻七）。「酌二菊酒一以赭レ面、候二松容一以攄レ懐」（大江匡衡「九日侍宴清涼殿同賦菊是花聖賢応製」『本朝文粋』巻十一〔三二八〕）。

○**詞花**　すぐれた詩文。「侍中悦晋太守宏性静詞華図書掌七閣之秘学」（『漢書』序）、「連二賓榻於林頭一、尽整二詞華之冠一」。（大江匡衡「三月三日陪左相府曲水宴同賦因流泛」『本朝文粋』巻八〔二一九〕）「酌菊酒以赭面、候松容以攄懐（大江匡衡「九日侍宴清涼殿同賦菊是花聖賢応製」『本朝文粋』巻十一〔三二八〕）。

○**蕪篇**　たいしたことのない詩篇。類似の表現としては「蕪辞寵悲班扇」（謝暉「和王主簿怨情」『文選』巻三十）、「学拙官冷、慙献蕪詞」（源順「夏日陪右親衛源将軍初読論語各分一字」〔二五九〕）。

六、おわりに

以下に当詩序の語彙の選択に関する傾向について簡単にまとめてみる。

詩序という形式の文体において、その中心となるのは、詩題の展開部である。詩序の作成法についての研究は佐藤道生氏の研究に詳しい。それによると、詩序を大きくわけると三つに分かれるとされる。第一段では、会合の基本事

項、誰が何時、何処で、何故、如何なる詩宴を催したかを描く。第二段は「題目」「破題」「本文」を含む部分であり、詩題を読み込む、詩序の中心となる。最後の第三段では、披講の時＝宴の終わりを告げ、序者が謙辞を述べる（「詩序と句題詩」『平安後期日本漢文学の研究』二〇〇三年　笠間書院）。当詩序で詩序の中心は第三段落にあたる。ここで詩題を巧みに展開してみせたことにより、序者としての面目を大いに保つことは想像に難くない。

ただし、一般に、詩序を為すことがその詩会におけるいわば代表ともいうべき仕事であるゆえに、序者たること自体が誉であり、当然序者は、己の知識と技術を尽くして詩序の作成にあたる。そのため、優秀な文学者が為した場合、詩序全体に技巧を凝らした作品が出来上がることになる。それは結果として難解な作品ともなる。

大江匡房の作品は、豊富な知識と技巧ゆえに、意味を読み取ることが難しいという側面がある。当然、匡房の詩序はその中でも文体としての性格と、そして披露される場による性格とが相俟って、さらに難解なものになるということも起こりうる。だが、詩序が公において披露されるものであるからには、参会者にまったく理解され得ないものは作らないのも当然である。

当詩序に於いては、このような矛盾を、『本朝文粋』の使用という形で解消しているということが考えられる。匡房の作品については、盛んに大江家の文藻を取り込むことなどから、江家文学の継承という側面が近年指摘されている。このことについて当詩序においても、大江家の先人の作を踏まえて為したと思われる箇所は多い。例えば、「訪二同情於仙都一、則紅桃開二三千之春霞一、求二異類於勝地一、亦白鶴占二勾曲之暁露一」の箇所などは曾祖父匡衡の作を踏まえている。だが当詩序では、大江家の祖先以外の先人の作も相当に参照していることがわかる。たとえば「風景春濃、泉石秋冷」の部分は菅原輔昭の詩序を、「銀黄金紫、躡二珠履一而連レ榻」の部分は紀在昌の詩序を、先に挙げた匡衡詩序との関連が見られる「白鶴占二勾曲之暁露一」という部分は、さらに藤原雅材の作も参照にしていることが確認でき

る。この他例を挙げるに暇ない。

このように、当詩序では日本漢文の精華を多く取り込んでいるが、これらが個別に匡房の手元に存したと考えるより、当時すでに完成して流布していた『本朝文粋』を参照したとする方が妥当ではなかろうか。『本朝文粋』は、匡房に先立って活躍した文学者、藤原明衡の編によるものである。明衡が『本朝文粋』を編纂した意図としては、一般に文章作成に際しての手本集を成すためということが言われている。大曾根章介氏は、この書の後世代の文学への影響は多方面にわたるものとし、「本書の秀句が賞翫されて多くの作品に引用されている」という指摘をしている（「解説」『本朝文粋』新日本古典文学大系二十七　一九九二年　岩波書店）。明衡は藤原式家の出身であり、菅江家のような累代の儒者ではない。つまり明衡は、たとえば匡房のように、自らの祖先の文藻を参考にして文書を作るということはできない。こうした明衡と同じ新興の儒者達が活躍していったのが、この平安後期である。大曾根氏が「本書の内容から推して多分に実用的性格を持っていることは見逃せない。その背後には多くの人々が本書の出現を待ち望んでいたと想像され、その成立には時代の趨勢や社会の要求が強く働いたといえる」とするように、恐らく『本朝文粋』は編まれた当初より、新興の儒者たちの間で盛んに利用されていたと考えられる。新興の儒者たちは、この書をもって文章作成の際の典範にしていたということである。（なお『本朝文粋』の受容については大曾根氏「本朝文粋の後代作品への影響（上）（下）—主として平安後期の漢文学について」（『国語と国文学』第三十八巻第一号、第三十九巻第二号　一九六〇年一月、一九六一年二月）に詳しい）。

こうした新興の文学者が登場する中、匡房も新勢力の文学の拠り所でもある『本朝文粋』を利用しているということである。当時の文学者たちにおいて『本朝文粋』は、文章を作り、さらに享受する際の共通基盤となっていたということであれば、匡房の難解な語の操作は、少なくとも文学を学ぶものにとって、全く理解できないものではなかっ

たということになる。当詩序の内容は同時代の人々に、容易にとまではならずとも、理解されうる背景はあったのである。

このことには、逆の効果も考えられる。認識基盤を共有した文章であるからこそ、匡房がその能力を他に誇示することができるということである。それは『本朝文粋』を典拠とする語彙に使用に限らない。当詩序では、第一段や第四段において経書の類や『文選』、史書に出典を持つ語を集中して使っている。いうまでもなくこれらは、大学寮での講義科目であり、匡房やその他の儒者にとって、必須にして基本の知識である。力に差はあれ、文学を学んだものなら、耳に目にしたことはある文章からの語彙ということである。

詩序というジャンルに於いては一般に、経書に出てくるような語は使わない傾向があるが、それを敢えて使用するところに、匡房の文学者としての意識が見られる。

以上のように匡房は、日本漢文と中国の経書を含む文学を典拠にもつ各語彙を使用することで、人々によくわかる形で自分の力を見せつける、華麗な詩序を為しているということがわかる。さらにこの詩序については、匡房が江家の文藻をどのような意図を持って取り入れていたのかを考察する必要があるのだが、それについては別項にて詳しく論じたい。

［付記］

小稿執筆にあたって、吉原浩人氏、相田満氏から多大なるご教示をいただきました。この場を以て、感謝の意を述べたいと思います。